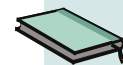


この本と私



「地下街の雨」 宮部 みゆき 著



集英社文庫

ホッと一息ついて・・・そんなときに手にした本でした。地下街に「雨」？地下街は雨とは無縁のはず。なぜ雨なんだろう？どんな雨が降るの？ステージは、大きなガラス窓のある地下街の喫茶店、通りゆく人々の仕草や様子が見える。肩の水滴を払う、濡れた傘をたたく、人の動きで地上の天気が分かる。街の様子まで想像する。景色もうつろくしく描かれていく。暮らしの風景が美しい言葉で切りとられる。私の心の中で切り取られた言葉をパーツ（断片）として組み立てる。パズルを完成させてゆくときのような集中力と、トキメキを覚えた。日常生活で起きている事柄全てに個人的な意味があり「今この時」に起きている事は結果であり始まりでもある。「始まり」を意識することが大切だと想った。普段の暮らしの何気ない行動や言葉に不思議なミステリーが潜んでいる。作者のたおやかな視点に感じ入りました。そしてもう一つの楽しみは、推理小説に必ずついている「意外な展開」です。クスリとほほ笑ましい物、ちよと怖い話、ゾーツとする結末、などなど盛り沢山。この物語のほか六篇が載っています。秋の夜長を楽しむためのとっておきの一冊になりそうです。

聰子